

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520753

研究課題名（和文） 19-20世紀転換期のイギリスにおける社会主義的環境保護主義の研究

研究課題名（英文） Socialist Environmentalism in Britain during the Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries

研究代表者

光永 雅明（MITSUNAGA MASAAKI）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：20229743

研究成果の概要（和文）：

本研究は、19～20世紀転換期の英国社会主義者たちの自然観や自然への態度を検討することにより、同国における環境保護主義の歴史的発展に光を当てることを目標とする。その結果明らかになった主要な点は以下の通りである。まず、この時期には少なからずの社会主義者が都市化を批判して農業生活を提唱し、そこに英国の自給自足化という意義も加えた。しかしその一方で、H. ソルトが開始した動物の保護をめざす運動は、都市化とより親和的なものであった。さらに G. B. ショウらは、イギリス帝国における天然資源の公的な管理が必要との議論を開始したのである。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to shed light on the historical development of environmentalism in Britain, by examining the socialist ideas about, and attitudes towards, nature in the late nineteenth and early twentieth centuries. It shows that many socialists criticized urbanism and advocated for an agrarian way of life, which, they believed, would also make Britain more self-sufficient. On the other hand, a new animal protection movement was launched by H. Salt, which was less in conflict with urbanization. Furthermore, G. B. Shaw and other socialists began arguing that they needed a public control of the natural resources in the British Empire.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学 西洋史

キーワード：西洋史、イギリス史、社会主義、環境史

1. 研究開始当初の背景

近年の歴史学で注目されている研究領域の一つが環境史である。その環境史研究の主要なテーマに含まれるのが、自然環境に関する思想や態度の歴史と言えよう。

この意味での環境史研究における近年の論点の一つが、「環境保護主義」environmentalismの歴史的淵源をどこに求め、その歴史的展開をいかに辿るかという問いである。「環境保護主義」を、「自然環境を、とくに人間の影響によってもたらされる損傷から保全しようとする関心」(『オックスフォード英語辞典』)と広く捉えた場合、それが1960年代以降の欧米諸国で顕著に広がったことはよく知られる。しかし「環境保護主義」という言葉の意味自体が現在なお流動的なこともあって、その歴史的淵源と展開に関しては、多くの解釈が出されている。

しかし英本国に関する限り、19世紀末から20世紀初頭の世紀転換期が環境保護主義の歴史的展開を検討する上でひとつの重要な画期をなすことは確かであろう。実際この時期には、たとえば景観・緑地保護や、動植物保護を目指す運動が英国で広がり、20世紀初頭には生態学も勃興しはじめるからである。またこの時期の景観保護等の運動は、同時代の社会思想の展開ともしばしば密接な関係を有していたという点からも、注目に値しよう。

だがJ. M. マッケンジーやR. H. グロウヴによる研究等を契機として、近年の環境保護主義史研究は、イギリス帝国におけるその発展を対象とすることが多くなった。それも一因として、世紀転換期の英本国に即した、環境保護主義の歴史研究は相対的に少なくなっている。この研究状況に鑑みれば、むしろこの時期の英国における自然観や自然への態度は、今こそ再検討に値するとも言えよう。

さて研究代表者はすでに、別の科学研究費補助金において、19～20世紀転換期にミース伯爵がロンドンで進めた緑地保全運動を検討し、その推進が保守的な帝国主義思想や愛国主義といかなる関係にあったのかも示した(研究課題番号: 17330044)。しかし同時代には、その一方で社会主義者たちも、独自の自然観や自然への態度を示していた。またこの主題に関する先駆的な研究は、E. カーペンターの伝記研究(都築忠七)等、1980年代を中心に進められたが、近年は、社会主義史研究自体が少なくなったこともあり、研究史上の蓄積が相対的に希薄になってきている。そこで研究代表者は、上述のミース研究に続くものとして、本研究の準備に着手した。

なお英本国における環境保護主義の歴史

は、イギリス帝国におけるそれと機械的に切断されているわけではない。たとえばR. グハが指摘するように、19世紀末の英国社会主義者にも見られる農業生活の理想化はガンディーにも影響を与えていた。本研究では直接的に立ち入りはしないものの、英本国の環境保護主義の歴史は、本国以外のそれとの影響関係という点からも、検討されるに値しよう。

2: 研究の目的

以上の観点から、本研究で目指されるのは、19世紀末から20世紀初頭の英国における社会主義者たちの自然観や自然への態度を明らかにすることにより、同国における環境保護主義の歴史的展開に光を当てることである。またここで言う「環境保護主義」は前述した広義の意味で用いる。

より具体には、本研究は以下の二点を明らかにすることを目的とする。

①工業化や都市化を批判し、田園地帯における農業を主体とした「自然な」生活を希求する、社会主義者たちの思想や実践の歴史的展開。②フェビアン協会等における、イギリス帝国における天然資源管理論の台頭。

なお①に関連しては、サリー州の田園地帯にて半農的な「簡素な生活」を実践し、1891年に「人道主義連盟」を創設した社会主義者ヘンリー・ソルトの思想と実践を明確にすることに特に重点を置く。これは、「動物の権利」を提唱するなど環境保護主義の歴史上、無視できない重要性を持つにもかかわらず、ソルトを主題とする本格的研究の蓄積が近年、十分には進んでいないと思われるからである(G. ヘンドリックによる1977年の評伝が現在なお、ソルトの伝記研究の到達点と言えよう)。また「人道主義連盟」は純粋な社会主義団体とは言い切れないが、ソルトが創設し、G. B. ショウなど著名な社会主義者たちも活動に参加したため、本研究の検討対象に加える。

また、①・②の双方において本研究では、T. R. マルサスの人口論に対する社会主義者の認識を明らかにすることにも注意を払う。マルサスの人口論は、自然環境と人間活動との間に本質的に葛藤がはらまれていると主張する議論であり、古典派経済学を通じてヴィクトリア時代にはよく知られていた。また現代の環境保護主義におけるその影響も指摘されている。その人口論に着目することにより、自然環境に対する人間の影響についての社会主義者たちの理解に示唆を与えることも期待できよう。

3. 研究の方法

当該時期はいわゆる「社会主義の復興期」を含み、英国社会主義関連の一次資料だけでも、検討すべきものは相当量に達する。そこで、この時期の英国における景観保護等の潮流は多彩ではあるものの、本研究は、社会主義陣営の内部における議論や活動に調査を限定した。

また社会主義者たちの自然観や自然への態度を調査するにあたっては、代表的な理論家たちの主要著作・雑誌論文等は無論であるが、社会主義系の定期刊行物や、フェビアン協会の機関誌・年次報告・執行部議事録等にも目を配り、社会主義運動内部における多様な見解や活動を拾い上げることを試みた。とくに「目的」で述べたソルトと「人道主義連盟」に関しては、ソルトの著作や論文類に加え、彼が編集した評論雑誌『ヒュメイン・レビュー』、「人道主義連盟」の年次報告や機関誌等も検討対象とした。

以上のうち社会主義系定期刊行物の一部は、マイクロフィルム等の形態で国内の大学附属図書館に所蔵されており、本研究ではこれらの図書館での調査を進めた。またフェビアン協会関連文書（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、——以下LSEと略する——図書館）、カーペンター関連文書（シェフィールド文書館）の一部は、マイクロフィルム等の形態で日本の大学図書館が所蔵しており、その調査も行った。

他方、上述の主要資料には、日本国内の大学図書館等には所蔵されていないものが多数、含まれている。そのため、関連資料を多数所有するブリティッシュ・ライブラリとLSE図書館を中心に英国での資料収集も進めた。LSE図書館ではアーカイヴ室も利用し、関連する貴重書、貴重雑誌、草稿類の調査も行った。なおP. クロポトキンの著作の影響のもとニューカスルで設立された農業共同体（後述）に関しては、同市立図書館の地方史部局でも調査を行い、また共同体設立跡地を同市内で確認した。

また本研究主題に関連する二次資料も収集し検討を加えた。

4. 研究成果

(1) 田園地帯における農業生活の提唱と実践

本研究で確認できた第一の点は、1880年代から1890年代の社会主義者たちの間に、工業化と都市化を批判し、田園地帯における農業生活（農業と同時にそれ以外の労働にも従事する半農生活を含む）を、より「自然」に

合致した生活形態として推奨する見方が広がっていたことである。またその見方は、しばしば、英国の自給自足化の提唱を伴っていた。

まず従来から指摘されていたようにカーペンターやソルトは、H. D. ソローの影響もあって、田園地帯での「簡素な生活」を自ら実践した。加えて本研究が、『菜食主義の論理』（1899, 1906）等ソルトの著作類から示したのは、ソルトが大衆規模での「帰農」論も唱えていたことである。ソルトは菜食主義者であったが、菜食主義が大衆規模で広がれば、英国での農業生産の必要性が高まり、それゆえ都市労働者の「帰農」が進むと展望していた。さらにソルトは英国の土地生産力は潜在的に高く、「帰農」により農業生産は向上しうると論じていた。またこの時期には、英国に亡命したクロポトキンが、都市近郊での集約農業は可能であり、それにより英国の自給自足化も達成されうると論じており、この議論はソルトの「帰農」論にも影響を与えていた。

これらの農業生活推進論が社会主義系の定期刊行物に浸透していたことも、本研究から示された。たとえばクロポトキンらが創刊した『フリーダム』紙は、農業生活こそが「自然との日常的コミュニケーション」を可能にすると指摘していた（1891年9月）。また社会主義系新聞で最大の発行部数を誇った『クラリオン』は、農業生産力の向上と自給自足化こそが、英国を飢餓から救うと論じていた（1896年2月1日付）。

農業生活構想は一部、実践にも移された。たとえば1895年にはクロポトキンの著作の影響のもとニューカスルにおいて農業共同体「クラウズデン・ヒル・自由共産主義・協同コロニー」が設立された。またこのコロニーは「大地に帰る」試み等として設立者により宣伝され（『クラリオン』等）、他方、食糧増産に貢献する、「自然によりよく触れ」る生活との評価も招いていたのである（[W. ジェイムスン]『飢饉との来るべき戦い』、1896）。

しかし、田園において「自然」と調和した農業生活を進め、英国の自給自足をも達成すべきとの主張は、社会主義者たちの間でも十分な支持を獲得したわけではなかった。というのも、社会主義者側の自然認識や自然への態度には、以下の(2)や(3)のような変化も生じていったからである。

(2) ソルトと「人道主義連盟」における動物保護論の展開

上述したようにソルトは、大衆的な「帰農」もたしかに展望していた。だがその展望には大きな制約もまた同時にはらまれていた。

第一に、田園における農業生活の推進それ

自体は、必ずしもソルトの最も主要な関心事とは言えなかった。従来から知られているようにソルトは、人間および動物、とくに後者に対する不必要な苦痛を取り除くことを目的とする、「人道主義」の推進にこそ力を入れていた（彼の著名な「動物の権利」論も、この文脈から発展したものと見えよう）。たとえばソルトは、生体解剖や、スポーツやファッションにおける動物利用等を批判し、その動物保護論の一環という意味も込めて、肉食主義を提唱していたのである。このうち肉食主義の大衆的な普及は、「帰農」を結果的に生み出すと論じられた。だがそれ以外の動物保護は、農業生活の推進を必ずしも伴うものではなかったのである。

第二に、ソルトが創設した「人道主義連盟」では、より明確に、都市生活を前提とした動物保護論が台頭していた。「連盟」はソルトの理念に従い、生体解剖など「動物への意図的な虐待」への反対を宣言した。しかし「連盟」は肉食主義を理想としつつも、その普及を目標には掲げていない。むしろ「連盟」は、英国では肉食がなお主流であることから、肉牛の運搬時や解体時における苦痛の軽減を活動目標にあげていた（「連盟」の「マニフェスト」等）。都市生活や肉食への批判というよりは、食肉生産過程の「人道化」にこそ「連盟」の精力が傾けられたのである（「連盟」の『年次報告』等）。

この点に関し、特に本研究で注目したのは、「連盟」内における、肉牛の海上輸送改革論である（論集『文明における残虐行為』、1896、所収）。この論考では、海上長距離輸送における肉牛の苦痛を軽減する策として、生きた肉牛ではなく、「冷凍肉とチルド肉」の輸送が提唱されていた。すなわち「連盟」内では、肉食主義・農村生活・英国の自給自足化の推進を展望するどころか、食肉の国際的な生産・流通体制の近代化を迫認する議論さえ生まれていたのである。

第三にソルト自身の議論においても、20世紀に入るとさらに、農業生活の提唱はより周縁的なものとなる。本研究は、20世紀初頭に入るとソルトは、「資本家の食欲」による観光開発からウェールズの山岳地帯等を守り、同時に「野生生物」を保護することも一つの目的として、英国における国立公園や自然保護区を提唱してゆくことを示した。

(3) フェビアン協会による農業生活論批判と帝国による天然資源管理論の台頭

農業生活や英国の自給自足化を推進する議論に対しては、フェビアン協会の内部等からも異論が出されていた。

第一に、クロボトキンによる農業生活の推進や英国の自給自足化論に対しては、フェビアン協会内から、非現実的との批判が出され

ていた（『フェビアン・ニュース』1898年8月号等）。

第二に、ボーア戦争勃発後にフェビアン協会内では、英国の自給自足論を批判するだけでなく、イギリス帝国によって「天然資源」の公共的な管理を進めるべきだとの議論すら台頭した。ボーア戦争勃発後に同協会の会員は親ボーア派と戦争推進派とに分裂した。しかし、G. B. ショウら執行部主流派を中心とする後者は、南アフリカの「天然資源」を私企業や個人投機家から守り、公共的に管理する主体としてイギリス帝国を位置づける議論も展開して、前者からの批判を回避しようとしたのである（1899年12月8日の協会員集会）。同様の議論はショウが執筆を主導した『フェビアン主義と帝国』（1900）でも展開された。

第三に、補足すれば、社会主義者は帝国の「自然」にこそ目を向けるべきだとの議論は、ボーア戦争勃発後に前述の『クラリオン』にも見られた。同紙ではショウが上述した帝国擁護論を展開した（1900年6月30日付）。またそれ以前に同紙ではA. M. トムスンが「社会主義的帝国主義」論を先駆的に展開していたことが指摘されているが（G. クレイズ）、そのトムスンの論考は、「労働により自然を征服する」などのレトリックを用いて、帝国における「自然」に人びとの目を向けさせる面も有していた（1899年11月25日付）。トムスンの議論は、「自然」の保護や管理というより、人間によるその徹底的な利用を主張したものであった。しかしそれは、英国での農業生活の推進や自給自足の達成を求める、同紙に以前見られた論調からは確かに大きく一線を画すものだったのである。

なお上記の第二の点に関しては、ショウらの主張は、社会ダーウィン主義者B. キッドが1890年代に提唱した、西洋諸国による熱帯資源管理論との類似性がすでに指摘されている（B. ポーター、クレイズ）。本研究はその指摘も鑑み、ショウらの主張の形成過程の洗い直しを試みたが、キッドの議論の影響等については十分に解明が進んでいない。この点は、本研究で十分に進められなかったことの一つであり、今後の課題としたい。

(4) マルサス人口論との関係

人間活動と自然環境との間に大きな葛藤を見る議論としては、当時すでにマルサスの人口論があった。実際19世紀末の段階でも、英国のマルサス主義団体「マルサス主義連盟」の機関誌は、世界人口の増大によって英国の食料危機が生じる可能性に警鐘を鳴らしていた（1900年11月24日付）。

だが本研究の結果示唆されるのは、このマルサス的な「資源—人口間の不均衡」への危機意識を、当時の社会主義者たちの多くは共

有していないと考えられることである。たとえばクロボトキンは、マルサスを批判し、土地の潜在的な生産性は高いと主張していた（『田園、工場、仕事場』）。類似したマルサス人口論批判は、ソルトの著作類でも見られた。またフェビアン協会における天然資源管理論にも、マルサス的な人口圧力への危機感の影響は、確認できなかった。

むしろ社会主義者たちは、しばしば、資本主義のもとで進行する都市の過密化・工業化・観光開発や、私企業による投機的な天然資源開発こそが、自然のあるべき姿を歪めていると論じていた。加えてソルトの場合には、「人道主義」の不十分さが動物に対する恣意的な危害を生んでいるとの主張も見られた。すなわち、社会主義者たちは、人間活動が自然に対して有する影響を懸念していたが、その懸念は「資源—人口間の不均衡」に関するマルサス的な憂慮とは異質のものであったと言うことができよう。

なお以上の研究成果のうち、別途記した論文・報告・図書に十分盛り込めなかった点については、現在準備中の雑誌論文等での発表を予定している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 光永 雅明、「「大地への帰還」—ヘンリ・ソルトにおける農村志向と人道主義」、『神戸外大論叢』、査読無、62巻2号、2011、57-76。
- ② 光永 雅明、「都市住民と自然保護—20世紀初頭のイギリスにおける生態学者とヘンリ・S・ソルトの議論」、『神戸市外国語大学外国学研究所 研究年報』、査読無、47号、2011、1-20。

〔学会発表〕（計2件）

- ① 光永 雅明、「19世紀末のイギリスにおける社会主義者たちの農村生活志向の変容—ヘンリ・ソルトの場合を中心に」、近代社会史研究会第241回例会、2012年3月17日、京都大学文学部。
- ② 光永 雅明、「19～20世紀転換期のイギリスにおける社会主義と「環境保護主義」—ヘンリ・ソルトを中心に」、英国研究センター（神戸市外国語大学）研究会、

2011年3月30日、神戸研究学園都市共同利用施設ユニティ。

〔図書〕（計2件）

- ① 光永 雅明、「ロンドン住民の健康と帝国の美観—ミース伯爵によるオープン・スペースの整備—」、岡村東洋光・高田実・金澤周作編著『英国福祉ボランティアの起源—資本・コミュニティ・国家—』ミネルヴァ書房、2012年、第4章、pp. 110-134。
- ② 光永 雅明、「社会思想のあゆみ」、木畑洋一・秋田茂編著『近代イギリスの歴史—16世紀から現代まで』、ミネルヴァ書房、2011年、第16章、pp. 341-356。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

光永 雅明 (MITSUNAGA MASA AKI)
神戸市外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：20229743

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし